OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津歴博だより

2006
No.62

開館15周年記念企画展

大津絵の世界

平成18年 3月4日(土)～4月16日(日)

大津絵　菩薩・個人蔵

大津市歴史博物館

企画展

「大津絵の世界」

大津絵の人気。それは、一目見ただけで思わず興味をそそられる鬼の念仏や藤娘などのユニークな絵柄と、近松門左衛門の浄瑠璃『傾城反魂香』（宝永五年（一七〇八）初演）に「三銭五銭の商い・・・」と謳われるような安価な値段にあったのでしょう。

街道をゆく人々の手頃な土産物として全国的ともいえる人気を博した大津絵。開館十五周年を記念する今回の展覧会では、新たに発見された初公開作品を含む江戸期大津絵を多数出品いたします。その数一八〇点。さらに、近世・近代の画家や浮世絵師が描いた個性的な大津絵にも注目するほか、現代にいたる大津絵などで本展は構成されます。

人の世の教訓を説く一方で、生真面目になりすぎず、ユーモアにあふれた描きぶりで多くのファンを持つ大津絵。江戸時代の人々の気質が素のまま伝わってくるその屈託のない自由奔放な筆遣い。その素朴で親しみやすく味わいある作品の数々を、初期大津絵の神仏物から中期の世俗物、そして後期の道歌入り大津絵は無論、画家ならではのユニークな大津絵作品、歌舞伎役者扮する大津絵のキャラクターを描いた浮世絵、そして現代にも生き続ける大津絵の世界を紹介し、民画の魅力を二七〇点あまりの作品によって振り返ります。

◆展示構成◆

●大津絵の店と大谷・追分界隈の賑わい

●大津絵―初期・前期・中期・後期―

○初期―仏画時代

○前期―世俗画の登場・続出する鬼と美人と奴

○中期―世俗画全盛と狂歌・心学風刺と教訓

○後期―十種大津絵への集約と縮小

●大津絵の文献

●大津絵の展開（江戸中後期から明治・大正期）

○画家の大津絵―絵変わり大津絵の流行―

●大津絵の再評価

●大津絵の現在

◆関連講座◆

三月一一日（土）「大津絵の世界―教えと心―」
大津絵師　四代目 高橋松山

三月一八日（土）「大津絵を楽しむ鑑賞講座」
横谷賢一郎（本館学芸員）

※申込み制。詳細は歴史博物館まで。

休館日：月曜日、三月二二日（水）

観覧料　一　般　八〇〇円（六四〇円）
　　高大生　七〇〇円（五六〇円）
　　小中生　三〇〇円（二四〇円）

主な出品作

●菩薩・個人蔵（表紙）

あさぎ色の描表装と緑青の蓮台が清々しい作品。柔和なお顔と心和む簡素な描線が魅力の初期仏画の逸品。

●阿弥陀三尊来迎図・個人蔵（二頁上段）

観音・勢至菩薩の頭部も肉筆で描く初期作品。ほのぼのとしたお顔や瑞雲の描線が印象的な仏画の優品。

●鬼の念仏・個人蔵（二頁中段）

鬼がお決まりの風貌で描かれるようになる前段階の作品。歯も牙も省略されずにたくましく生え揃う。妙に長いヒゲや、いびつな顎まわりなど、見かけだけの偽善を風刺した鬼の姿は、もともとこんな風貌だった。

●藤娘・個人蔵（二頁中段）

言わずと知れた大津絵のマドンナ。この初期作品では、藤娘のポーズに合わせて、打ち掛けや振袖の柄、そして藤の枝が優美に流れる。上方らしいシンプルで洒落た装飾性を見せる作品。

●若衆旅姿・個人蔵

諸国を鬼が勧進するかと思えば、見目麗しい若衆も道中を往来しています。腰には大刀二本?を差すが花笠を被り、大胆な柄の旅装束。一七世紀の若者のかぶきぶりが分かる初期世俗画

●傘さす女・個人蔵

高下駄を履いても長い太夫の裾。雨の日には片手でたくし上げ、もう片手に傘を指して花街を歩いた。情緒あるひとコマを捉えた初期美人画作品。

●円山応挙　鬼の念仏・個人蔵

絵変わり大津絵の早い作例。本作では、鬼は勧進をしておらず、奉加帳の代わりに数珠を左手に持ち、鉦を叩いて念仏を唱える殊勝な姿を描く。鬼も救われるということか?応挙二〇代後半から三〇歳頃の若描き。

第53回 ミニ企画展
近江八景―工芸編―

■平成18年3月14日(火)～4月23日(日)

近江八景は絵画として描かれるばかりでなく、工芸品の意匠（デザイン）としても取り入れられました。

特に陶磁器では、伊万里の染付（青花）、漆工芸では蒔絵において近江八景の意匠を用いた作品を見ることができます。そして、工芸における技法上の制約によって、絵画とは異なる洗練された様々な風景表現が生み出されました。八景の工芸作品は、文房具や茶道具を中心に見られ、近江八景が趣味人の生活に華を添えていました。

本展では、館蔵品を中心に、バラエティに富んだ近江八景の様々な「顔」を紹介します。

近江八景蒔絵香炉台　19世紀　本館蔵

第54回 ミニ企画展
大津の仏教文化7 塑像（そぞう）と塼仏（せんぶつ）

■平成18年4月25日(火)～6月4日(日)

七世紀中頃に唐より輸入された最新の造像技法である塑像と塼仏は、その独特の表現と荘厳効果により全国の寺院へ広まっていきました。中でもこの時期に大津宮が造営された近江では、いち早くその技法が導入されたらしく、全国的に見ても多くの出土例が知られています。例えば、大津市穴太廃寺では、珍しい塼仏と銀製の押出仏が出土しており、また、大津宮に関りの深い崇福寺や南滋賀廃寺でも、この時期の塑像や塼仏が多数見つかっています。また、かわいらしい童顔の頭部で有名な竜王町の雪野寺や、大仏造営の機関「造東大寺司」による造像の石山寺本堂からも、大量の塑像片が発掘されています。

本展では、県内で出土した遺物を中心に、全国の塑像の写真パネルをまじえながら、バラエティに富んだ古代の仏像の表現を紹介します。

塼仏断片 大津石居（いしすえ）廃寺出土・個人蔵

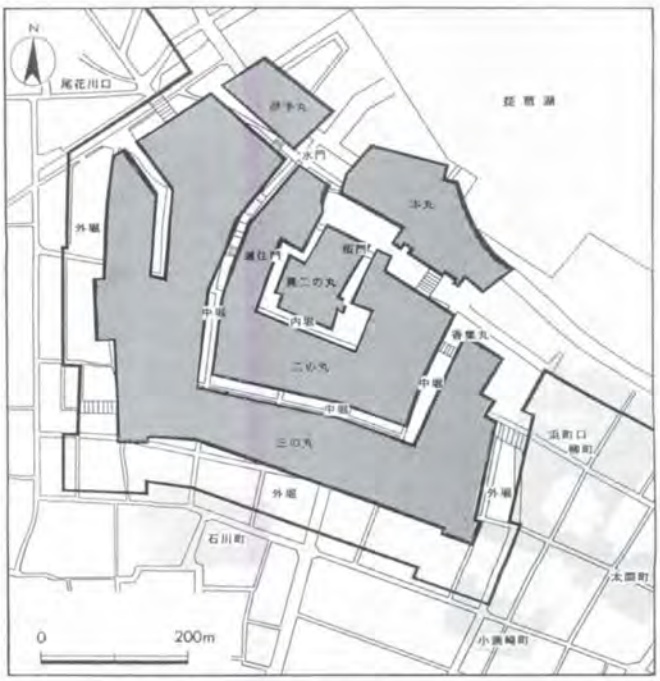
学芸員ノート

大津城の復元

大津城は、羽柴（豊臣）秀吉の命により坂本城の廃城に伴って、天正一四年（一五八六）頃に現在の浜大津周辺に建設された城です。初代城主は、最後の坂本城主であった浅野長吉（長政）です。浅野の次の城主は、増田長盛で、後に秀吉の五奉行の一人になる人物です。その後、城主は新庄直頼、京極高次と続きます。第四代目城主京極高次は、関ヶ原の合戦に先立つ大津城攻防戦に東軍方として籠城し、毛利軍の率いる西軍約一万五千人の大軍を大津城に足止めしました。この京極高次による西軍の足止めが、関ヶ原の合戦の勝敗に大きな影響を及ぼしたといわれています。関ヶ原の合戦後、勝利した徳川家康は大津城に入って戦後処理を行い、城主に戸田一西を任命しました。しかし、九カ月後には大津城を廃城とし、膳所に城を移します。また、大津城の天守閣は彦根城に移築されます。

このように歴史的に重要な役割を果たした大津城ですが、現在では、坂本城や膳所城に比べてあまり知られていないように思います。

大津城の規模については、現在縄張りを示すような当時の古絵図は残っておらず、その復元が困難な状況にあります。しかし、明治時代以降に大津城について考証された資料が三点あります。明治三五年（一九〇二）堀田璋左右著『大津籠城』の「大津城廓図」、昭和四年（一九二九）『京都連隊区将校団郷土戦史』第二巻付図の「大津城攻防戦闘要図」、昭和一四年（一九三九）田中宗太郎著『大津城の研究』の「大津城考証図」です。その後、これらの資料や江戸時代の絵図などを参考に、昭和五五年（一九八〇）発刊『新修大津市史』第三巻の「大津城復元図」において大津城の姿が復元されました。それによりますと、本丸は琵琶湖中に島のように浮かび、本丸を守るように奥二の丸、二の丸、三の丸、伊予丸が三重の堀をめぐらせて配置された水城です。城の規模は東西約七〇〇m、南北約六〇〇mで、大規模の城に復元されています。この復元図を山田豊三郎氏所蔵の寛保二年（一七四二）写の「大津町古絵図」と比較してみますと、東側の外堀は絵図の風呂屋関にあたり、この堀に大橋と呼ばれる橋が架けられていました。旧橋本町のあたりです。東側の中堀は扇屋関で、この関の延長上には中堀町という町名が残っています。西側の外堀は今堀関と記されており、現在の琵琶湖疏水の取水口にあたります。西側の中堀は、川口関と記され、堀跡がほぼ当時のまま埋め立てられ、現在川口公園として残っています。南側の外堀については、絵図によりますと現在の中町通と京町通の間に細い水路が



大津城復元図

走っており、また、現在でも中町通と京町通の間に段差があることから、この通りの間に城の南側の外堀があったと考えられています。大津祭曳山展示館の南側にある石垣が外堀の石垣であるといわれています。

次に、考古学の分野（発掘調査）から大津城について見てみたいと思います。大津城跡の発掘調査は昭和五五年から開始され、平成一七年までに十数ヶ所で発掘調査が実施されています。しかし、調査地のほとんどが本丸推定地に集中し、本丸周辺の調査はわずかしか実施されていません。結論的に言って、本丸部分以外はほとんど判っていないのが現状です。本丸跡では、石垣や礎石建物跡などが発見され、ほぼその範囲も復元できます。また、大津城の遺物として、土器類や貴重な金箔瓦なども出土しています。推定された本丸の範囲は約二六四〇〇m^2を測り、この部分は埋め立てによって造成されています。発掘調査の結果、盛土は一m以上行われていたことが明らかであり、単純に一mとしても二六四〇〇m^3の土砂が必要となります。現代的な計算をすると一〇トンダンプ約四八〇〇台に相当します。さらに、二m、三mの盛土となればその二倍、三倍となります。本丸部分だけでなく、二の丸や他の部分も埋め立てによる造成であれば膨大な土量を必要としたことでしょう。

最後に、以前から疑問に思っていることを記しておきたいと思います。平成一一年（一九九九）に発刊された『図説大津の歴史 上巻』の

「大津町古絵図」模式図

「大津城縄張推定復元図」を見てみますと、堀の部分がすべて水色に塗られ、あたかも琵琶湖から外堀まで水が入り込んでいるように表現されています。しかしながら、自然に琵琶湖の水を外堀まで引き込むには、地形の傾斜から考えてかなり大がかりな石垣を必要とします。札の辻あたりの海抜は九六m前後です。発掘調査の結果から、大津城期の琵琶湖の水位を八四・八mと仮定しますとその標高差は一一m以上になります。つまり、一一m以上の深さの堀を掘り、石垣を築かなければ水を引き込むことはできないことになります。このような石垣を築くことは、当時として技術的には可能であったかもしれませんが、果たして実際に築いていたのでしょうか。

大津城については、またまだ謎が多いように思います。今後の発掘調査の成果や古絵図の発見に期待したいと思います。（学芸員 青山 均）

本丸内礎石建物跡（上）・同東側石垣（下）

大津市歴史博物館
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp